

## 言語への目覚めの出前授業の成果と課題

—学習者の言語態度中心に—

クロス ルベン（個人研究者）

### 1. はじめに

小中高の各学習指導要領外国語編(平成 29 年または 30 年告示)には、「グローバル化が進展する中、日本の子供たちや若者に多様な外国語を学ぶ機会を提供することは、言語やその背景にある文化を理解することにつながる」ことから、「英語以外の外国語教育の必要性」が指摘された。また、「学校の創設の趣旨や地域の実情、児童の実態などによって、英語以外の外国語を取り扱うこともできる」と明記されている。しかし、この「児童の実態」に関しては、日本の学校で英語圏以外の外国にルーツを持つ児童の増加や、英語以外の外国語に興味を持つ児童を考慮に入れず、事実上全国の殆どの学校の外国語の授業で英語のみが実施されている。また、校外でも英語に触れる機会が多いことを考えると、多くの児童は小学生のころから「外国語＝英語」という思考に影響を受けていると考えられる。

本研究では、児童に多言語に触れる機会を提供することを目指しながら、筆者が沖縄県内の小学校、中学校、高等学校で実践した言語への目覚め(仏語:L'éveil aux langues)の出前授業に関して、児童が回答した事後調査の結果を紹介する。授業とアンケート調査の参加者数は、沖縄県本島と離島の小学校3校(190名)、中学校1校(91名)、高等学校1校(20名)、合計301名である。学年別には小学4～6年生、中学1年生と高校1年生の回答を収集した。出前授業は学校側からの依頼によって実施された。また、世界の国に関心を引く学習環境を整えるために、授業の前に筆者が持参した世界の多くの国旗や玩具で教室を飾り、希望する児童には民族衣装を着させた。出前授業の内容は、「言語とは何か」を考えさせる質問から始め、言語学諸分野に沿った現象(例えば、「プーバ・キキ効果」という「言葉の実験」を通して音と図形の連想について考える)や、言語の多様性を体験させる項目が含まれた(世界の言語の数や地理的地位、世界の文字と音、手話言語、個別言語に関するクイズ及び実践)。アンケート調査の内容は、授業に対する感想の他にも、主に言語に対する学習者の関心(学びたい言語とその動機付け、言語別の関心度)を計ることを目的とした。

### 2. 授業の感想に関する結果

授業の感想においては、「楽しい」型の回答が多数を占め(119件)、「面白い」(46件)や、世界の言語や国を知れたことへの言及も多かった(72件)。特に学習者が気に入った内容はクイズ(92件)で、気に入った言語は韓国語(102件)、中国語(30件)、英語(29件)、スペイン語(22件)の順であった。そしてほとんどの回答者(94.6%)は、出前授業が他の授業(社会や英語)や将来(外国人と話すとき)に役に立つと思うと回答した。最後に93.7%の学習者が授業を再び実践してほしいと回答したことから、長期的な研究の可能性を検討する必要がある。

### 3. 言語態度に関する結果

アンケート調査では「来年度から英語以外の言語の授業がある場合、何語を選びますか。」という質問に対し、「英語と英語以外の言語」、「英語のみ」、「英語以外の言語のみ」、「どちらも選ばない」という選択肢を設けた。総合的な結果を見ると、英語とその他の言語の両方を選ぶ割合が最多(56.5%)で、その次は「英語以外の言語のみを選ぶ」(20.9%)、「英語のみを選ぶ」(19.9%)、「どちらも選ばない」(2.7%)の順であった。

特に興味深い発見は学年別の差であった。小学4年生と5年生は英語以外の言語を含む選択を選ぶ一方、学年が上がれば上がるほど、英語のみを選ぶ傾向が見られる。選択の理由を分析した結果、英語以外の言語に関わる選択には、「楽しそうだから」、「やってみたい」、「知りたい」のような好奇心に関する理由が多く挙げられた。そして、両方の言語を履修する理由には「両方知りたいから」、「両方役に立つから」、「英語はもう既にやったから」などが含まれた。一方、「英語のみ」を選んだ児童は統合的な関心よりも、道具的な動機付け(例:「英語を知ってたらどこでも通用するから」、「英語は世界の共通語だから」、「受験に必要」)と懸念(例:「英語が既に大変で他の言語を入れたらごちゃごちゃする」)を示した。英語のみを選んだ児童よりも、「英語と英語以外の言語」を選んだ児童の方が、英語も含め、外国語が総合的に「楽しい」という楽観性(例:「面白そう」、「1つより2つ学んだほうがいいから」)がうかがえる。「どちらも選ばない」と回答した学習者には、「外国語が苦手」や「英語が元々苦手で覚えきれないため、英語、英語以外の言語は選択しない」など、英語学習の経験に基づき、他の言語の学習も失敗に終わるのではないかと想定する考えが示唆される。なお、この質問では言語ごとの関心度を把握できないため、23の言語について言語別の関心度を四件法を用いて測定した。その結果、言語に対する関心度の平均が最も高かったのは小学4年生(2.06)であるのに対し、中学1年生では1.70、高校1年生では1.33であった。このことから、学年が上がれば上がるほど言語に対する関心が減少することが示唆される。そして、総合的に関心度が高い言語は英語(2.37)、日本語と韓国語(2.28)、沖縄語(2.22)、中国語(2.03)、フランス語(1.98)とスペイン語(1.97)の順であった。ただし、これらの言語の関心度は、学年によって順位が異なった。本研究の今後の課題としては、授業の効果を計測するために、事前調査も行い、その他の学年からもデータを収集することである。